

Hirai, A., & Koizumi, R. (2009). Development of a practical test with a positive impact on learning using a story retelling technique. *Language Assessment Quarterly*, 6, 151-167.

### Background

- スピーキングテストには多くの困難が伴い、特に実用性が低いため、教室でのスピーキングテストはあまり行われていない(Honda, 2007)。
  - スピーキングの学習と指導のバランスは良いとはいえず、スピーキングを評価する機会を増やして、学習にポジティブな影響を与えることが望まれる。
- そのため、筆者らは **Story Retelling Speaking Test (SRST)**を開発中。
  - しかし、SRST を教室環境でのスピーキングテストに応用した試みはまだない。
- 本研究は、SRST が日本人英語学習者にどのように感じられるかを、実用性と波及効果を観点として検証し、実用的なスピーキングテストの開発に寄与することを目指した。

### Practicality and Test Impact

- テストの実用性と波及効果を Bachman and Palmer (1996)の the usefulness framework に基づき検討する。The usefulness framework は、テストの有用性を実用性、影響、信頼性、構成概念妥当性、真正性、相互性の6つの特質から説明するもので、これらが個々のバランスを保ちつつ有用性を最大化することが重要だとする。
- 計画、実施、採点、分析の段階にかかる時間・労力を軽減する試みがいくつかなされてきた。SRST の最終的な目標の1つに、4ステージ全てにおける必要資源を軽減することがある。
- SRST はテストがもたらす影響も重視する。テストの影響は、(a)社会や教育システムに対するもの、(b)個人（特に学校の生徒・教師）に対するものの2つに分けられる。特に、学習や指導に関わるものは波及効果と呼ばれる。
- 正の波及効果は、本物のようなコミュニケーション活動の具体例を含んでいる場合や、教室での活動を上手く反映している場合に生じる。より具体的には、理想的な正の波及効果があると、生徒が普段取り組む学習とテスト勉強との間に、ほとんど違いがなくなると考えられている (Messick, 1996, p.241)。
- SRST は、教師が教室活動とテストとを簡単にリンクできるように設計されることが望ましい。
- 本研究では、受験者が感じた波及効果のみを報告する。また、アンケートにより他の4特性（信頼性、構成概念妥当性、真正性、相互性）も調査する。

### DESIGNING A CLASSROOM-BASED TEST

## Applying Story Retelling Tasks for Speaking Assessment

- 再話は教授法としてのみでなく、第二言語習得理論研究における実験手法としても用いられてきた。スピーキング能力をみる場合、再話は目標言語で行うことが望ましい。
- 再話のインプットはリーディングとリスニングの場合があるが、本研究ではリーディングを採用した。本研究の協力者（初級・中級学習者）にとって、テキストを読む方が内容を理解しやすいと考えられるためである（Hirai, 2001）。
- SRST は(a)リーディング、(b)再話の2セクションからなる。リーディングセクションでは読解能力が測定される。ここで協力者が内容理解問題に正当できない場合は、基礎的な言語知識を欠いた **prespeaking** レベルだと判断される。
- 再話セクションではスピーキング能力が測定される。このために受験者は(a)物語を再話すること、(b)物語に対する自分の意見を述べることの2つの活動に取り組む。テストの真正性を高めるために、問題用紙には、英語の授業でクラスメートと教師に再話するという状況を示した。
- 意見を自分の言葉で表現し、それを明確に伝える必要性は、正の波及効果を生むことが期待される。

## Strength and weaknesses of SRST

- SRST は現状のスピーキングテストに対して、実用性の面で優位性を持つ。
  - ・設計・準備段階：手持ちのテキストを使える。テキストの難易度を変えることで、様々な熟達度の受験者に対応可能である。
  - ・実行段階：録音音声によるテストは面接よりもはるかに負担が少ない。多人数による実施も可能で費用もあまりかからない。
  - ・採点段階：採点も単純で時間がかからない。受験者が発表する内容の多くは再話活動から予測できるためである。再話内容とテキストを比較すれば、英語非母語話者の教師でも簡単にフィードバックを与えることができる。
- SRST は正の波及効果を与える可能性を持っている。
  - ・テキストを与えられることで、特に熟達度の低い学習者の発話を助けられる。
  - ・目標の言語項目をテキストに含めることができる。これをリーディングセクションでインプットし、再話セクションでこれをすぐに練習できる。
- SLA の観点から SRST の効果は、簡潔かつ適切なアウトプットを求めることで、意味的処理から、言語習得に必要な統語的処理への移行を促進すると説明できる（Swain, 1985, 1995）。再話は深い認知処理と、学習者の知識とテキスト内容の統合を促し、その結果、より効果的な学習をもたらすと考えられる（**Craik& Tulving, 1975; Fincher-Kiefer, Post, Green, & Voss, 1988; Joe, 1995; Swain, 1985**）。
- 上記のような深い認知処理は、テキストに対する意見を求めることでより促される。
- しかし、SRST には以下のような留意点、弱点がある。

- (1) 受験者の記憶力が成績に影響する可能性があること。
- (2) テスト結果に対する読解の影響をできる限り小さくすること（本論文における SRST の焦点はスピーキング能力のみに置かれるため）。
- (3) スピーキングパフォーマンス中の言語が、学習者がもともと持っていたものか、テキストから新たに学んだものかを区別するのが難しい場合があること。
- しかし、教室実施のテストとしての性質を考慮すると、SRST の長所は上記の留意点を上回るものだと考える。

## ADMINISTERING SRST

本研究では SRST の実用性や妥当性を検討するため、アンケート調査を行った。観点は(a)構成概念、(b)影響、(c)相互性、(d)手続きの適切さ、(e)タスクの難易度やテスト材料の適切さの 5 つである。

### ● Participants

日本人大学生 43 名。Aural spelling and meaning test (Hirai, 2005) と筆記語彙テスト (Koizumi, 2005) の成績から英語熟達度は初級～中級と考えられる。

### ● Materials

#### (1) SRST

- ・英検 3, 4 級の読解、または面接試験のテキストから、100 語程度のテキストと 150 語程度のテキストをそれぞれ 2 つずつ選定。
- ・テキストに対して内容理解問題 3 つが用意され、再話時の手がかりとして、固有名詞かキーワードが 4 語を選定した。
- ・ネイティブスピーカーが指示を英語で読んだものを録音して使用した。

#### (2) 3 パート構成のアンケート

Part1 受験者の海外生活経験や英語資格

Part2 読解、再話、テスト全般に対して 5 段階で評価

Part3 テストの難易度やスピーキングテストの受験経験を自由回答形式で記入

### ● Procedure

実験は言語実験室にて、以下の手順で実施された。

- (a) テキスト読解 2 分、(b) 内容理解問題に口頭で回答 1 問 30 秒×3 (テキスト参照可)
- (c) 再話 2 分 (自分の意見含む)、(d) アンケート

## CONCLUSION AND PLANS FOR FUTURE RESEARCH

### Analysis of Questionnaire

#### Construct

- 表面的妥当性に関する 4 項目を分析

- ・ Q2-2 : (リーディングセクションについて) このタスクはリーディング能力を測っていると思いますか。
- ・ Q2-3 : (リーディングセクションについて) このタスクはリスニング能力を測っていると思いますか。
- ・ Q2-7 : (再話セクションについて) このタスクはリーディング能力を測っていると思いますか。
- ・ Q2-8 : (再話セクションについて) このタスクはリスニング能力を測っていると思いますか。
- 対応あり ANOVA とボンフェローニ法の下位検定の結果, Q2-8 は Q2-7 より有意に高く, 受験者は再話セクションについて, スピーキング能力を測定していると捉えていることがわかった。
- 一方, Q2-3 と Q2-2 はほぼ同様だった。リーディングセクションは, リーディングとスピーキングの両方の能力を測っていると捉えられていた。理由として, 質問や回答を口頭で述べることを求められていた点が考えられる。

### Impact

- SRST による正の波及効果を調べるために以下の 3 項目を分析した。→高い数値
- ・ Q2-20 : このテストは英語学習に有益ですか。
- ・ Q2-21 : テスト受験後, 英語学習のモチベーションが上がりましたか。
- ・ Q2-22 : このようなスピーキングテストを頻繁に受ければ, 英語力が上がると思いますか。
- Q2-22 に agree・strong agree と答えた受験者 (27 名) 全員が, SRST を受け続ければスピーキング力や要約能力を向上させられると書いていた。そのうち 3 名は, 語彙力の向上にも効果がありそうだと答えていた。このことから, SRST は言語の形式と内容両方に注意を向けさせ, 要約能力の向上に寄与することがわかる。
- このタイプのスピーキングテストを受験したことがなかったが面白く有益だと思う (4 名), フィードバックを希望 (1 名), 学習を補助する項目をテキストに含めると良い (1 名) という回答もあった。
- 以上の受験者の認識から, SRST はスピーキング能力と英語学習へのモチベーションに対し, 正の波及効果が与えられることが明らかになった。

### Interactiveness

- 相互性は, 情意面に対する以下 2 つの項目から考察された。
- ・ Q2-17 : テスト中, 緊張や不安を感じましたか。
- ・ Q2-19 : テスト中, たくさん話そうと努力しましたか。
- 受験者の多くが緊張しており, できるだけ話そうと努力していたことが分かった。  
→SRST は受験者に適度な緊張感を与えており, Bechman and Palmer (1996) が述べる相

互性を示した。

#### Appropriateness of procedures

- 受験者は録音音声の音量，明瞭さ，は十分だと感じていた。再話の録音も簡単であったと答えていた。さらに多くが周囲の音声で気が散ることはなかったと答えていた。  
→録音形式の SRST が確かな実用性を持つことが示された。
- 再話セクションに関する項目 (Q2-9~Q2-13) も高い値を得ており，特に Q2-10「読んだ内容を思い出すのは難しかったですか。」の値から，記憶力による再話パフォーマンスへの影響はあまり強くないことが分かった。
- しかし，自由回において，最初のテキストを上手く再話できなかつたと答えた受験者 (1名)，与えられた時間 2 分間は不十分だったと答えた受験者 (4名) がいた。
- 以上から SRST に以下の 4 点の変更を加えた。  
(a)練習用のテキストを用意する，(b)再話時間を 2 分 30 秒に伸ばす，(c)2 分を過ぎたら音で受験者に知らせる，(d)内容理解問題の回答時間を 10 秒減らして 30 秒にする。

#### Appropriateness of Task difficulty and test materials

- リーディング，再話それぞれのセクションの難易度に関する項目(Q2-1, Q2-6)から，読解問題は再話よりも簡単だと感じられており，統計的に有意差も確認された。したがって，リーディングタスクは無理なく理解できるもので，SRST タスクの難易度は適切なことが明らかとなった。
- テキストの要因について，内容と長さが相互に関係していた。長さで内容の影響を和らげるために，SRST には短いものと長いもの 2 種類のテキストを用いる必要がある。

#### CONCLUSION AND PLANS FOR FUTURE RESEARCH

- 以上の検証から，SRST は教室環境での使用に耐えうる実用性と，正の波及効果を持つことが示された。
- 今後の課題として，より厳密な研究を行う必要がある。
  - ・実用的かつ妥当な採点システムの確立。：候補として EBB (Empirically derived, Binary-choice, Boundary-Definition) scale (Turner & Upshur, 1996, 2002)があり，いくつかの基準 (コミュニケーションの効率性，文法的正確さなど) からなる EBB scale を開発し，既存の尺度と比較することを計画している。
  - ・評価者間・評価者内信頼性や，必要なテキスト数を調べるために，多相ラッシュモデル (Linacre, 1989)や，多変量一般化可能性利用 (Brennan, 2001)を用いる予定である。
  - ・構成概念妥当性を検証するために，多特定多方向性行列を用いる予定である。
- SRST の有用性を確かめるために，既存のスピーキングテストとの比較も望まれる。ピアソンの相関係数を用いた比較において併存的妥当性を検討することができる。また，

既存のテストが SRST の分散をとの程度説明するのか、どの程度の独自分散が残るのかを明らかにすることで、SRST の長所や短所を明らかにできる。

Koizumi, R., & Hirai, A. (2012). Comparing the story retelling speaking test with other speaking tests. *JALT Journal*, 34, 35-60.

## 1. Background

本研究では、SRST を Versant (Pearson Education, Inc., 2008) と Standard Speaking Test (SST; ALC Press, Inc., 2010) と比較して、SRST の得点に基づく解釈の妥当性を吟味する。テストの共通点と相違点を調べるために、その言語機能と得点、発話が分析された。

(RQ1) SRST から引き出された言語機能を Versant や SST のそれらとどう比較するか。

(RQ2) どの程度、SRST の得点は Versant と SST の得点と関連しているか。

(RQ3) 3 つのテストの得点分布に違いはあるか。

(2 グループ間：初級・中級者群と上熟達度群)

(RQ4) どの要因が 3 つのテストの得点の違いに関係しているか。

## 2. Method

- **Participants** : 日本人大学生, 大学院生 64 名 (初級・中級群と上位熟達群の 2 群に分けられた)
- **Instruments**
  - (a) SRST (所要時間 : 約 22 分)
    - ・ 黙読→再話→理解度テスト→キーワードを見て意見を言う
    - ・ 録音された再話は EBB scale で評価される。
    - ・ 練習用テキストと読解テキストは英検 3・4 級の過去問からの難易度が似たもの (FKGL 4.1-4.6) が選ばれた。
  - (b) The Versant Speaking Test (所要時間 : 約 15 分)
    - ・ スピーキング・リスニング能力を測る目的をもつが、タスクではスピーキング力のみ測っている。
    - ・ 6 つのタスク (Reading aloud, Repeating a Sentence, Short Answer Questions, Sentence Builds, Story Retelling, and Open Questions) が電話か PC で実施される。
    - ・ 採点は incorporating human rating patterns に基づく。
  - (c) The SST (所要時間 : 約 10~15 分)
    - ・ 対面式インタビューテスト
    - ・ 受験者の熟達度・興味に応じて、テスト内容を試験官が調整する。

- ・ 5つの段階 (Warm-up questions, Single picture, Role-play with the interviewer, Picture sequences, Wind-down questions) がある。
- ・ インタビューは録音され, (最低) 2名の評価者によって採点される。

- Procedures 2週間のうちに3つのテストを受験する。
- Analyses

(RQ1) 言語機能のチェックリストが O'Sullivan, Weir, and Saville に基づき作られた。

(RQ2) SRST の2つの物語のテスト得点の平均を求め, 多重回帰分析をし, SRST の得点の分散を見た。

(RQ3) ヒストグラムを用いて, 2つの熟達度グループ間の得点分散を比較した。

(RQ4) 低得点は, 標準得点に転換された。再話内容を書き起こした。

### 3. Results

(RQ1) describing, paraphrasing : すべてのテストから引き出された。

elaborating : SRST と SST で引き出された。

SRST のみによって引き出された言語機能はなかった。

(RQ2) SRST の得点は 46%の確率で他の2つの得点により予測できた。

Versant と SST で高得点だった受験者は, SRST でも高得点を取る傾向にある。

(RQ3) 初級・中級グループのほとんどの協力者が Versant と SST では低得点だったが, SRST では, 得点に幅があった。逆に, 上位熟達群は Versant と SST の得点に幅があったが, SRST では低得点は見られなかった。

→SRST : 初級・中級学習者の得点を弁別するのに適する。

Versant と SST : 熟達度の高い学習者を弁別するのにより適している。

(RQ4) 得点の違いにつながる2つの要因が明らかになった。

- ・ タスクとテストされた言語機能 (例 : planning time とタスクの種類)

- ・ タスクと評価の際に注目された点 (SRST と SST 間において。fluency ⇔ minor grammar mistakes)

### 4. Discussion and Conclusion

- SRST は Versant より多いが SST より少ない言語機能を引き出す。
- 3つのテストの統計データによると, SRST と Versant は “facility in spoken English”, SST は “functional speaking ability” を測る傾向があった。
- 引き出される言語機能の違い : SRST, Versant < SST
- 2群間の得点分散が提示していること
  - ・ SRST は初級・中級学習者の測定に適している
  - ・ Versant と SST はより熟達度の高い学習者の測定により適している

- 評価の目的と状況に応じて適切なスピーキングテストを選ぶ際に有益となる、各テストの相対的な利点を示した。
- SRST の利点
  - (a) 無料
  - (b) 教材に合わせて簡単に作りやすい
  - (c) 初級中級学習者のスピーキングパフォーマンスを測定しやすい
- 今後の研究に求められること
  - (a) 3つのテストを受験する順番のバランスをとること
  - (b) 熟達度テストを用いて協力者をグループ分けすること

## ■ 考察

SRST に関する 2 本の論文についての考察を述べる。主に教育現場における活用と SRST の採点方法についてである。

まず教育現場における SRST の活用についてである。論文でも述べられているように、教育現場においてスピーキングテストを頻繁に実施することは難しいという現状がある。私は公立中学校で 3 年間、中学 1 年生の授業を担当していたが、私の経験では、スピーキングテストの実施は、年に 2~3 回であった。実施回数を増やして、生徒のスピーキングに関する関心を高め、スピーキング能力を伸ばしたいと常々考えていた。SRST はそのような教師を救う効果的なものであると考える。手持ちのテキストを用いてテストを実施でき、多人数の実施も可能で費用もあまりかからず、英語非母語話者でなくても簡単にフィードバックを与えられるという利点があるからである(Hirai& Koizumi, 2009)。自治体によっては、導入段階で録音機器の購入が難しい場合などがあることも考えられるが、それを乗り越えられ、教師が自身の指導と SRST をうまく結び付けられたら、生徒のスピーキング能力がより育成されると考える。

次に SRST の採点方法についてである。Koizumi and Hirai (2012)で掲載されていた SRST の問題を解き、採点基準にもとづき、自身の再話を採点した。個人的に、二分法の採点方式だと、採点の判断が難しいと感じた。たとえば、「流暢さはややある」という項目に対して、Yes, No の判断を下す場合に、「流暢さ」をどう定義するかが問題になってくる。1 つの学年を複数人の教師で担当していて SRST を導入する場合などは、採点基準を教師間で共有し、評価者間信頼性を高く持つことが必要だと考えた。

以上で SRST の教育現場での活用と、採点方式について述べた。SRST の有効性が教育現場で広まり、スピーキング指導が充実し、生徒のスピーキング能力が育成されることが望ましい。今後の課題として、SRST の採点方法について考察を深めるとともに、SRST が現場で活用されている例があるか調べていきたい。

参考文献



Hirai, A., & Koizumi, R. (2009). Development of a practical test with a positive impact on learning using a story retelling technique. *Language Assessment Quarterly*, 6, 151-167.

Koizumi, R., & Hirai, A. (2012). Comparing the story retelling speaking test with other speaking tests. *JALT Journal*, 34, 35-60.

英語科教育学Ⅷ

### 授業内で学んだ重要なポイント

担当：Y.T.

はじめに

本授業内では、授業におけるスピーキング指導・活動について、活動を設計する際の視点や、評価のポイントなど、多くの有益な点を学んだ。本レポートでは、その中でも、日本人中高生のスピーキングに対するニーズとモチベーションの与え方、スピーキングタスク設計上の注意点、スピーキング活動中の辞書使用に焦点をあて、学んだことをまとめる。

#### 1. Introduction : An Overview of Teaching Second Language Conversation (pp.1-8)

ここでは、筆者のエクアドルにおける教授経験、筆者のアドバイス、学習者の視点からの会話クラス、教師の視点からの会話クラスなどについて述べられている。私は、公立中学校で英語を教える中で、英語を勉強する Long Term Goal を生徒に持たせることが難しいと感じてきた。日本では日常生活の中で英語を使う機会が少なく、そのような環境の中で生徒は「英語をなぜ勉強するのか」、「英語を勉強する意味なんてない」というようなことを感じる例もあり、私も実際に生徒にこのようなことを言われたことがある。そこで、2つのディスカッションポイントを設定した。

##### 1. 1. 日本の中高生のスピーキングに対するニーズは何か

ディスカッションでは、Short Term Goal (短期的な目標) ととらえられるようなニーズが意見として出てきた。中高生で共通するニーズとして考えられたのは、英検の2次試験(スピーキング試験)に合格するため、留学のため、ALT や外国人と話したいから、純粋に英語が好きだからなどというニーズである。英語圏の文化が好きで、英語の歌の歌詞を理解できるようになりたいというニーズや、英語圏のドラマや英語を字幕なしで理解できるようになりたいというニーズ、英語をかつこよく話したい! という純粋なニーズなども考えられる。高校生のニーズとしては、TOEFL 対策、授業での英語でのディベートで発言したいからなどがある。大学入試に TOEFL が導入されるという動きがあるため、中高生自身が「英語を話せるようになりたい」というニーズは今後より一層高まっていくのではないかと考える。

ここまで Short Term Goal について述べてきたが、やはり教師は Long Term Goal も生

徒に示していく必要がある。大人になった時、英語を話せることがいかに重要かということである。グローバル時代の今日、仕事で英語を使うことはよくある。世界において問題が山積みの中、日本人は地球人として、英語を使い、世界中の人々と話し合いながら改善に向けて努力していく責任があると考えられる。また「海外旅行に行った時に、英語が話せると便利だよ。」などと伝えることができる。

このような長期的な目標も生徒に提示しつつ、生徒の発達段階や英語の熟達度に応じて、生徒が持っている短期的な目標やニーズを教師はとらえて授業を工夫すべきである。

#### 1. 2. どのようにして日本の公立中学校で英語を話すことに対して生徒を動機づけるか

生徒を動機づけるには、教師の努力によるところがかなり大きい。授業の雰囲気づくり（安心して話せるいい雰囲気）、英語を話しやすくする授業形態の工夫（ペアワークやグループワーク）、英語の重要性や教師自身の経験を伝えることなどである。

また、「英語なんて一生使わないよ」などという生徒には、その言葉の深層にある学習者の心理をとらえることが必要である（田尻，2009）。英語に対してネガティブな発言をする彼らの心理は、「英語がわからなくて辛い」、「授業が面白くない」、「先生が嫌い」、などといったものであるかもしれない。その心理をとらえ、発達段階に合わせて授業の中で扱うアクティビティや、会話教材の中に取り入れる題材、授業形態などを工夫していくべきである。また私が重要だと考えるのは日ごろから彼らとコミュニケーションをとることを大切にして、相互理解を深めることである。その中で、授業をどう工夫すればよいのかについて発想が得られると考える。

## 2. Chapter 2: Research on the Teaching of Conversation

ここでは、効果的なスピーキングタスクをデザインする上で、注意すべき3つの要因が述べられている。その要因は、①情報が一方向か双方向か、②発話のプランニングタイムの有無、③決められた正答の有無（open-ended or closed-ended）である。授業では、どのような特徴を持つスピーキングタスクが日本で英語を学習する生徒にとって効果的であるかを議論した。

#### 2. 1. どのような型のスピーキングタスクが中学校・高校の生徒にとって効果的か

中学校においては、初期段階は、生徒同士（あるいは生徒一教師）で英語のやりとりを続けるには、知識と経験がまだ乏しいため、一方向タスクが必要である。一方向タスクで知識やタスクにおける手続きをある程度学びレディネスを整えたうえで、生徒自身が自信を持って双方向タスクに取り組んでいくことが理想的だと考えられる。また、双方向のタスクに取り組む際には、発話のプランニングタイムを設ける方が良いと考える。即時的なやりとりをできる生徒、つまり、タスクを与えられ、そのタスクに関してすぐに英語で会話を始められるような生徒は限られているためである。

また生徒の言語知識や運用能力は限られているため、ターゲットとなる言語項目の習得をねらいやすい closed-ended task が有効である。このようなタスクの例として、一方向タ

スクとして **self-introduction** を行った後、質問・応答の仕方を学 **Q & A** を行うなどのタスクが提案された。他にも、**closed-ended task** として、**Show & Tell** は有効であると考えられる。話す題材として、自分の興味のあるものや好きなものを取り上げられるため、取りかかりやすいというのが一つの大きなメリットである。そして **Show & Tell** は中学1年生でも高校3年生でも学年を問わず取り組めるもので、使用文法の条件を変えれば様々な場面で用いることができる。

## 2. 2. 発話のプランニングの時間を設けないタスクはどのような目的で必要か

**planned task** は発話のためのプランニングタイムを設けることで、英語が不得意な生徒も含めてより多くの生徒が活動に取り組めるという利点と、生徒が文法的・音韻的・内容的側面により注意を払えるという利点を持つ。

一方、**unplanned task** は、現実世界における英語コミュニケーションに近いという点で、より“**authentic**”な特徴を持つ。このような即時的なやりとりを求められることで、生徒はより本物の英語コミュニケーションへの態度を育もうとするとともに、社会言語学的能力（即時的なやりとりにも有効な、より簡易な語の使用能力など）を伸ばすこともできる。

教師は生徒の熟達度にあわせて、目標言語の特性や、タスク遂行に求められる認知処理などタスクの特性を把握すべきである。それらを把握したうえで、できるだけ生徒が興味を持つような題材やトピックを用いて、スピーキングタスクを設計するべきである。プランニングタイムの有無も状況に応じて使い分けると効果的である。

## 3. 辞書使用について

### 3. 1. スピーキング活動における辞書使用について

スピーキング活動中に辞書を使わせることの是非についての議論が行われた。知っている語彙の中で、より多くの言語項目を話させたい場合は、もちろん辞書は使わない方がいい。また、知っている単語の中から自分の表現したいことを表現するという能力は、中学高校を卒業しても要求される。実際の英語使用状況では、辞書を使っているのは時間がかかってしまうため、知っている単語で言い換えられる場合は、知っている単語で説明した方がコミュニケーションがスムーズになると考える。辞書の使用は、会話の流れを切断してしまう。そのような実際的な英語使用の状況に慣れさせるという点でもスピーキング指導においては、活動中はなるべく辞書を使わないようにさせる方が良いと考える。

プランニングタイムのあるスピーキング活動では、辞書を使わせてもいいと考える。しかし、往々にして、難しすぎる単語を選んでしまい、聞き手が理解できないという場合がある。そのため、辞書を使わせる際には、聞き手が聞いて理解できるような易しい単語、もしくは既習の単語を選びなさいという指示が必要である。

### 3. 2. 英単語は英語で教えられるべきか—英英辞典の使用

生徒の熟達度に応じて、可能な限り、英単語も英語で教えられるべきだと考える。中学校では難しい場合が多いと思うが、高校では、特に進学校の場合は必ず必要であると考え

る。単語の定義を英語で提示することや、日本語と英語で書かれた英単語の定義を結びつけるなどといった活動が考えられる。英英辞典はその際便利である。私が研究会で聞いたことのあることとして、東京都の両国中学校は、中学校 1 年生段階から英英辞典を持たせており、日常的に英英辞典を使わせるとともに、英英辞典を使って、文法項目の後置修飾を教えるなどしている。背景として、両国中学校は進学校であり、中高一貫校であるということがあり、この背景があるからこそそのような指導が実現できるということがある。

英英辞典の使用のメリットとして、「アウトプットにつながるインプット」をすることができるということがある。生徒の熟達度に応じてできるだけ英語で英単語を教え、英英辞典の使用を奨励していきたい。

#### 最後に

これまでに大きく分けて 3 点について述べてきたが、他にも学んだことは沢山ある。コレクションについて、リキャスティングについて、流暢さと正確さのどちらを重要視するかなどである。スピーキングタスクの設計をする際に役立てていきたい。また、今後の課題として、具体的なスピーキングタスクについて考えていくとともに、SRST などのスピーキング評価について理解を深めていきたい。

#### 参考文献

田尻悟郎『(英語) 授業 改革論』教育出版, 2009 年, 115-116 頁